

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第121号 令和6年(2024)3月31日



「土佐名物 傘帆の行列」 (当館蔵)

資料見聞 帆傘船の絵葉書

本資料は、第二次大戦以前まで、波の穏やかな浦戸湾周辺にてよく見られたという帆傘船をとらえた絵葉書です。いま見てもフォトジェニックで、当時、人気の題材であったことに頷けます。

帆傘船は文字通り、帆の代わりに傘をつけた釣り船です。つけられた蛇の目傘は通常のものより大型で、骨も柄も大きく強く作られていたようです。角度、方向は調整可能で、日よけや移動に使われたといえます。昭和初期に撮影された「旧五台山橋」の下を通る帆傘船の写真があることから、その頃には利用されていたことがわかります。

帆傘船に乗って釣りに興じる光景は、人々の日常に深く浸透し「昔懐かし帆傘の舟で いきなあの娘とニロギ釣り」というフレーズが、昭和12年、土讃線全通記念に開かれた南国土佐大博覧会にて紹介された「新ヨサコイ歌詞」に選ばれています。

帆傘船は、埋め立てが進み、大型船の出入りが盛んになると姿を見かけなくなりました。当たり前前にあったはずなのに、年代が経つにつれ、人々の記憶からも薄れはじめ、「昔懐かし」と懐古すらできなくなりつつあります。本資料はそんなかつての光景を「今」に伝えてくれる貴重な1枚です。

(青井)

企画展

タイムトリップ土佐 ― 絵図・絵葉書・写真 ―

会期：令和6年4月29日(金)～6月23日(日)

青井 恵理香

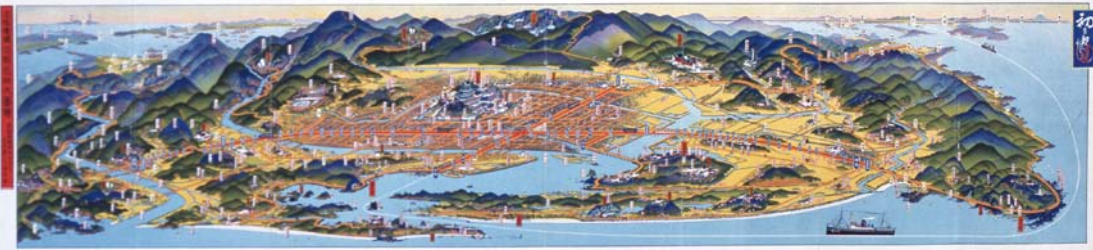


図1「土佐電気鉄道沿線名所大図会」(当館蔵)左上は九州、下関、釜山まで見える。

本展では、主に当館収蔵の絵図・絵葉書・写真といった資料をとおして、高知の過去・現在・未来の姿を見つめていきたいと思えます。

この試みは、記録性の高い絵図・絵葉書・写真だからこそ可能になるのではないかと考えています。

かつての私達がなくしてしまっただけのもの。それでもいつかの私達が大切に保管してきたもの。これからの私達がなくしてしまうかもしれないもの。それらすべてを歴史資料達は、「今」の私達に伝えてくれます。

時間をゆつくり遡り、いつしよにありし日の高知の姿を見る旅に出ましよう。

■高知を結ぶ

令和6年は、高知の交通史にとって節目の年です。JR(旧国鉄)土佐線開業100年、そして、とさでん交通(高知県交通との合併前の旧土佐電気鉄道)が路面電車を運行し始めて5月で120周年を迎えます。

『土佐電気鉄道沿線名所大図会』(図1)は、昭和5年、土佐電気株式会社(土

佐電気鉄道の後身)からの依頼で、鳥瞰図の名手・吉田初三郎(1884～1955)によって描かれました。高知市街が中心に大きく描かれ、東は室戸岬、西は須崎までがゆがんだ形で描かれているユニークな絵図です。

吉田初三郎の沿線名所図絵は、昭和天皇に「きれいでわかりやすい」と賞賛を受けたほどで、ブランドになり、鉄道会社や地方自治体はこぞって初三郎に絵図を注文しました。

絵図面の中央を交差する朱線が高知市内に巡る路面電車線を表し、各線のうえを四台の電車がそれぞれ走っています。高知市内に点在する古社や史跡が紹介され、神戸からの船便で高知に入ると土佐電気株式会社が運営する電車やバスで不自由なく高知市内の名所に行けることをアピールしています。

土佐電気鉄道の建設は、明治37年(1904)5月のことです。

財政や地形の問題で、四国の鉄道建設は大幅に遅れており、それまで、人の移動は馬車や人力車、船が頼りでした。

四国初となった電動客車は、棧橋(現棧橋車庫前)―梅ノ辻間と堀詰―乗出(現ブランド通)間での運行を開始しました。

図2の絵葉書は、電車の始発点となった高知市堀詰の様子を撮影してい

ます。いつ頃、撮られたものかハッキリしていませんが、自動車と併走する路面電車が見えます。

線路は順調に伸びていき、製紙業が盛んであった伊野(現いの町)や遊郭のあった新地(現高知市稲荷町付近)などへも届くようになりました。

土佐電気鉄道の建設は、高知の産業と人の移動に大きな影響を与えたのです。



図2「絵葉書 高知市堀詰」(当館蔵)

(参考：『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』2012年 高知市、野沢敬次『四国の鉄道 1960年代～90年代の思い出アルバム』2019年 株式会社アルファベータ ブックス)

■土佐を描く

ここからは少し時間を遡って、更に昔の高知の様子を見てみましょう。

江戸時代の土佐国は、長我部氏宗家が断絶したあと、徳川氏の命によってやって来た山内氏によって治められます。

江戸の幕府と地方大名の関係は、常に緊張を孕んでいました。

いつ、戦国時代のように下克上が起こってしまいかわかりません。その不安から、幕府は地方で大名達が武力をできる限り蓄えないように工夫しつづけました。

しばしば幕府が提出させた国絵図や城下町絵図はそれを監視する例といえるでしょう。

国絵図は文字通り、土佐国全体を俯瞰して描かれた絵図です。土佐国を巡る国境・海浜・郡境・河川流路・主要街道・村数や石高などが記載されており、ひと目でその国の実態が把握できるようになっています。

当館には、横幅2メートルを超える国絵図が収

蔵されています。

高知市内の豪商家すじに伝来した国絵図で、元禄時代（1688～1704）に描かれた国絵図を転写していることがわかっていますが、何を目的としてつくられ、その家に伝わってきたものかはわかっていません。

各村をつなぐ主要陸路は朱線で表現



図3「国絵図」(当館蔵)

され、村と村をつなぐ経路がわかります。

浦戸を起点とした航路情報も詳しく、当時も浦戸湾が国の玄関口であったことがわかります。

注目のポイント

は、西端の海上に描かれた沖ノ島です。正保元年（1644）か

ら万治2年（1659）まで15年にも及んだ伊予国との間で国境論争がありましたので、その国境線は特に意識して描かれていることが色分けの様子からうかがえます。

城下町絵図は、町の主要路や用水路、武家屋敷が記され、当時の都市景観が把握できるようになっています。特に江戸時代初期に描かれた城下町絵図は、城郭情報が詳細に描かれ、幕府の軍事査察図的な特徴が目立つといえます。

必ずしも情報量が多い資料ではありませんが、作成年代の古い順から見ると人口の増幅により、どのよう



図4「尾浦(大浦)図」(当館蔵)

整備された町割りの大部分が現在の高知市街に引き継がれているのがよくわかります。

是非、展示会場にてご覧ください。

また土佐国は太平洋に面していますので、城下町だけでなく、海辺の地域・集落の実態把握も課題でした。太平洋に面し、海を介して直接外界とつながる可能性があるため、藩は

海防のためにも海岸線や岬、岩礁、港などを把握する必要がありました。

当館蔵の『土佐国浦々之図』は、西部を中心に土佐国の沿岸部の様子が収録されています。

現状と比べると海面上昇などの自然的要因や開発による埋め立てによって今では消滅した小島や浜が描かれています。失われた当時の景観が当資料により復元できます。

(参考)『描かれた高知市 高知市史 絵図地図編』高知市 2012年、『新収蔵古絵図展 描かれた土佐の浦々』高知県立歴史民俗資料館 2005年)

■高知の未来

私達の暮らしのそばにある広大な土佐の海は、恩恵を与えてくれるだけではありません。

嘉永7年（1854）11月。土佐国を襲った巨大地震による津波と火災は「親子・兄弟・夫婦・子孫・主従・尊卑の差別なく」人々を襲い、逃げ場をなくした者達の「叫びにくるしむ有様は八艱地獄（八つの苦しい地獄）に呵責（責め苦しめられている）の有様」と残されるほどでした。（『絵本大変記』高知県立図書館蔵）

嘉永の大地震（安政南海地震）を経験した当時の人々は、このような災害はくり返し起こると認識しており、後世へのメッセージとして、被害の状況を克明に記した日記や絵図、地震碑を残しました。

高知県立図書館蔵の『絵本大変記』はその1つで、幕末〜近代にかけて活動した絵師林金蔵（通称絵金）が描いたといわれています。

「ゆるゆると年も替れば、卯のはるに、門松たてず、七五三引かず、死に別れたる尊霊へ念仏申計なり、かかる大変に落ちぶれたる人氣を養ん為」描かれました。

炎に吞まれ、家屋に押しつぶされ、波に流され、必死に逃げまどい、ただ茫然とするほかにない人々の姿は、着



図5「思をしも あみとられし浪に 数々の見れば拾ふて あまの命 綱引仲間」

（『絵本大変記』（高知県立図書館蔵）パネル展示）

添えられた狂歌は百人一首が下敷きになっている。

地震と津波を正しく恐れ、適切に避難すれば、死傷者数は8000人程度に抑えられると言われています。

長らく本県では、南海トラフ地震への備えが課題となり、取り組まれてきました。

当館でも平成25年、平成30年に、地震対策への啓発になればと南海地震を題材にした企画展を催しています。

ハザードマップの確認、防災グッズの見直しに並んで、200年前からのメッセージをどう受けとり、どう活かし、それをどう残して、伝えていくかも、今を生きる私達の課題ともいえるのではないのでしょうか。

（参考：高知県立美術館監修『絵金極彩の闇』グラムブックス2012年）

■高知を語る資料達

資料達は変わりゆく高知の姿の語りべです。人間のようにしゃべる口を持ちませんが、雄弁に語りかけてきます。普段は気づきにくいことですが、こうして、資料を辿っていくと、今この瞬間、私達の日常にある当たり前は、当たり前でないことを感じさせてくれます。

資料達が誘う時間旅行に浸りながら、郷土の歴史を考える一助になりました。幸いです。

ているもの、髪型が現代風ではないというだけで、私達の未来を予知しているようでもあります。

それより92年後の昭和21年（1946）12月21日。和歌山県沖を震源とした巨大地震（南海大地震）が、空襲からの復興間もない高知を襲い、海際の

町は広く津波に吞まれ、多くの死傷者、生活困難者を生みました。

更にこの時から78年。私達を遅かれ早かれ襲いくる南海トラフ巨大地震への警鐘が鳴らされつづけています。

政府による推計で高知県での死傷者数は約5万人に及ぶとされていますが、

追悼 坂本正夫第二代館長

歩いて考える

ーフィールドを愛した民俗学者ー



を思い、死を覚悟したときに出会った

神島次郎の『近代日本の精神構造』で

した。近代日本は、農業生産を基盤と

して祭りを中心とした秩序のある村落

共同体（第一のムラ）にならった擬似

的な共同体（第二のムラ）、すなわち

藩閥や学閥を指導者層が秩序としたた

め、市民社会が育たず、人材が都会へ

流出して村落共同体が崩壊していった

ことなどを論考した本です。

この本によって、先生はこれまでと

は違った価値観を知り、民俗学を志し

たと、折にふれお聞きしました。

教諭として在職中、先生は『日本の

当館との関わりは、創設時の文化振

興専門者会議のメンバーとして参加さ

れたことにはじまります。そして、そ

の後、吉村淑甫初代館長からのバトン

を受け、平成11年4月から平成18年3

月までの7年間、第二代館長として当

館の運営に当たりました。

就任当初のインタビューでは、「収

蔵スペースが少ないということ、館

のあり方に関わる問題」と指摘してい

ます（『岡豊風日』33）。

また、現代社会を理解するために民

俗学は有効な学問のひとつであり、土

佐の民俗的特徴は他所からの影響を無



追悼 市原麟一郎先生

民話と

ともに

市原麟一郎先生が、令和5年9月

24日にご逝去されました。大正10年

（1921）11月22日生まれの先生の

生涯は、民話とともにありました。

先生は土佐民話の会を主宰、民話を

記録し民話紙芝居で普及しました。ま

た月刊『土佐の民話』を昭和46年から

平成25年まで500号発行しました。

民話との出会いは昭和18年。教諭

だった先生は書店で『肥後民話集』を

手に取り、「これは面白い」と教室で

子どもたちに語り聞かせました（『岡

豊風日』46）。なお、先生の『しばて

ん童子』は小学時代の愛読書、しばて

んのバンは私のヒーローでした。

当館では、平成10年から平成28年ま

で味元家旧住宅主屋等で民話紙芝居を

公演いただきました。平成11年には

880冊の民話の本を寄贈いただきました民

（中村）

（中村）

令和6年度 秋季企画展

「三館連携企画 生誕二〇〇年記念 河田小龍」にむけて

今年は、幕末から明治にかけての土佐を代表する絵師、河田小龍（文政7年（1824）～明治31年（1898））の生誕二〇〇年の節目の年にあたります。そこで今秋、当館、県立美術館、県立坂本龍馬記念館の三館が連携した企画展を開催するべく、現在準備を進めています。

そのなかで、小龍関係資料の合同調査を定期的に行っています。合同調査の楽しみは何と言っても、一人では気づけない、思いがけない発見に出会えること。

例えば、河田小龍が描いた《高知城下鳥観図屏風》。高知市の筆山方面から高知城下を眺め、東は御座、南は桂浜、北は土佐神社、西は高知城が描かれています。明治6年に取り壊された高知城二の丸、三の丸が描かれていることから、それ以前の作品だと考えられています。

- この作品を合同調査した際には、桂浜の下（南）に吸江が描かれているが、実際の景色と違うのではないかと。写真ではない小龍の創意はどの程度あるのだろうか。
- 土佐海援隊旗の配色と同じ赤白赤の

旗がみえる。それ以外の旗もある中で、旗の種類と掲揚されている場所を検討したら面白いかも。

なぜ第六扇は白紙なのだろう。違う形状だった作品を屏風に仕立て直し、利用、保存してきたのだろうか。などいろいろな意見が出ました。

一人の絵師、一つの作品であっても、異なった視点から解釈すれば、違う読み解き方がある——つくづく、文化は縦割りでは語れない、多角的なとらえ方が必要だと実感しました。

展覧会では、これらの調査を踏まえ、三館それぞれの強みを生かした内容となる予定です。ご期待ください！
（那須）



河田小龍筆《高知城下鳥観図屏風》（個人蔵、当館寄託）
高知県立美術館「日曜市一台所から観光名所へ」展図録（2007）より転載

コラム

岡豊城跡探訪

昨年10月から、「岡豊城跡探訪」として月に1回岡豊城跡内を歩いて遺構の特徴など説明をしてきました。

10月27日には礎石建物跡編として、詰や三ノ段を中心にその規模や性格等を説明しました。詰の礎石建物には瓦が葺かれていましたが、詰下段・三ノ段では葺かれていませんので、その違いなどから性格の差が見えます。土佐の城郭で礎石建物が出現し始める時期にかけて、これから周辺城郭で発掘調査が進めばもっと解明され長宗我部氏の城づくりの一端が見えてくるでしょう。

11月13日は、畝状堅堀編として実施しました。岡豊城の斜面には多くの堅堀が確認されており斜面の横移動を遮断する役割をもっている遺構です。3条以上の連続した堅堀について、畝状堅堀群や畝状空堀群とかの名称が使用されています。土佐では、斜面部に連続堅堀が構築された城跡が少なからず認められます。また、岡豊城跡の北西部には横堀や土塁とセットになった堅堀群が特異な遺構として存在し、この遺構は連続堅堀との時期差も認めら

れます。

12月10日は、詰、三・四ノ段編として、各曲輪の機能や名称について日頃考えていることを紹介しました。土佐特有の呼び方である詰や二ノ段などは、長宗我部地検帳で主郭部を詰ノタンとか、それに繋がる曲輪を二ノ堀と記載されている城跡が多いことからこのような呼び方がされています。検地が行われた天正16年から17年にかけては、古城となっている城郭が多いですが、曲輪名だけは記載されています。長宗我部氏の本拠である岡豊城やその一族の城郭については、検地がされていませぬので、曲輪の名称がわかりませんが、同じような名称が使われていたと推測できます。岡豊城の名称も「南路志」では豊岡城と記載されており、いつ頃名称が変わったのか不明です。

1月28日は最終回で、縄張り編として実施しました。縄張り図は、各城郭研究者によって縄張り図の表現方法が異なる場所があり、研究者の遺構の見方や捉え方によって変わります。岡豊城跡は、これまで高知高専測量同好会作成の実測図に始まり、城郭研究者の本田昇・池田誠・千田嘉博氏の縄張り図が作成されています。最新の縄張り図は、赤色立体地図を利用した詳細で正確な縄張り図になっています。

（松田）



第14回岡豊山さくらまつり

令和6年4月7日(日)

中庭の特設ステージでは、太鼓やダンス、南国市のご当地キャラ大集合など多彩なプログラムをご用意しています。

美味しいグルメブースも出店(9店舗)。館内ワークショップや国史跡・岡豊城跡の史跡ガイドツアーも体験することができます。

当日、館の駐車場が満車の場合は、臨時駐車場(岡豊小学校グラウンド)を利用できます。また、再開館を記念し3月29日から4月7日までの期間、「坂本龍馬湿板写真」と「山内容堂湿板写真」の実物資料の展示、入館された方へのプレゼントを行います。

そのほか、3月29日、30日、31日はキッチンカーが各日2~3店舗出店するなど楽しめる内容を多数準備中です。ぜひ、岡豊山で春の訪れをご体感ください。
(総務事業課)



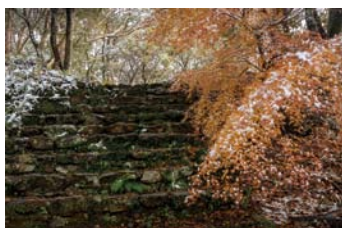
第18回岡豊山フォトコンテスト作品展示

令和6年3月29日(金)~5月26日(日)

来場者の皆様が選ぶ「みんなのお気に入り賞」の投票も行います。奮ってご参加ください。



▲「秋日和」島元慶子(最優秀賞)



▲「初雪」太田和子(優秀賞)



▲「若さ、はじける!」鳥原弘子(優秀賞)



▲「秋よ来い」小柳由紀(スマホ大賞)

第19回「岡豊山フォトコンテスト」も開催予定です。岡豊山や歴史館へお越しの際には、撮影を。



土佐のまほろばウォーク2024 —歴史にどっぷり!—

今年度は「歴史にどっぷり!」ハマる企画です。高低差などの地形や位置を確認しながら、じっくりと史跡を歩くことで見えてくる、古くから栄えたまほろばの地。最新の情報をまじえながらたっぷりご案内します。ぜひ、ご参加ください。



①4月21日(日) 古墳にどっぷり!

土佐のまほろばには古墳がいっぱい。高知の3大古墳とされる小蓮古墳や横穴式石室の芝ノ前古墳、今は人も通らない山道に行く野津古墳など、この地の特別な古墳をご案内します。
(小蓮古墳、芝ノ前古墳、野津古墳など)

②5月16日(木) 先人の知恵にどっぷり!

暴れ川とも言われる岩清水川(現 国分川)。堤をつくり、決壊させないための工夫をして水を治めてきた先人の知恵をじっくり学びます。
(和田地区堤跡、水越堤跡、吉田城跡付近堤跡など)

- いずれも8:30~11:30予定
参加費:各回500円 定員:各20名
ガイド:土佐のまほろば地区振興協議会ほか
- 申込受付:令和6年3月1日(金)9:00~
- 10月以降も開催決定!
詳しくはチラシ、当館HPで!申込み受付中

第14回 岡豊山さくらまつり

4月7日(日) 10:00～15:30

グルメブース、南国市のゆるキャラ大集合! など

れきみんの日

開館記念日

5月3日(金・祝)

展示に関するクイズや貴重資料の期間限定公開など、楽しいイベントを開催!

入館
無料



第15回 長宗我部フェス

5月11日(土) 10:00～

迫力の鉄砲隊演武、ステージイベントやグルメブースも予定。

民家で囲炉裏の火焚き

毎月第3日曜日(3月を除く) 9:30～12:00

4月21日、5月19日、6月16日

定期的にいろいろに火を入れます。パチパチ薪がはぜる音を聞きながら、暖かい火を囲みませんか?(予約不要)



歴民館のホームページをリニューアル!

歴民館のホームページをこれまで以上に見やすくしました。是非、ご覧ください。



新しいホームページアドレスは、次のとおりです。
<https://www.kochi-rekimin.jp>

岡豊風日(おこうふうじつ) 第121号
令和6年(2024)3月31日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 高知市岡豊町八幡1-0-99-1
TEL 0888-866-2221
FAX 0888-866-2110

開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)
臨時休館することがあります

観覧料 (通常展) 大人(18才以上) 470円
団体(20名以上) 370円
(企画展) タイムトリップ土佐
― 絵図・絵葉書・写真 ―
通常展示込み 520円
団体(20名以上) 420円

無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)

印刷・川北印刷株式会社

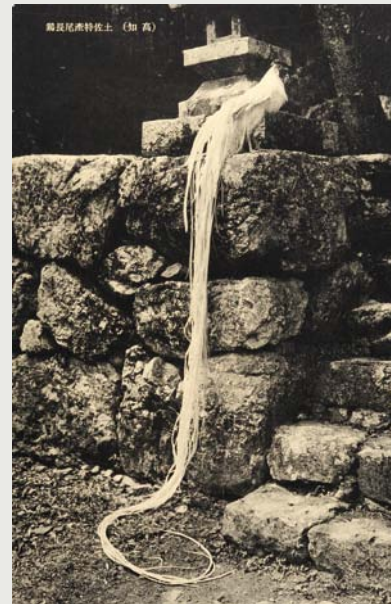
<https://www.kochi-rekimin.jp>
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

企画展 タイムトリップ土佐

― 絵図・絵葉書・写真 ―

4月26日(金)～6月23日(日)

絵図や絵葉書は、ある時期の風景・風俗・人々の営みをそととどめ、今に伝える貴重な資料です。見る者をタイムトリップさせ、歴史を再発見させられます。土佐の商家に伝わった全長2メートルの『御国絵図』、海沿いの村の様子を描いた『土佐国浦々之図』、どこか懐かしい光景を写した写真絵葉書など当館収蔵資料を中心に紹介します。あわせて、令和6年に路面電車運行120周年を迎えるとさでん交通(旧土佐電気鉄道)関連ミニコーナーも設け、ありし日の高知の姿を見つめます。



絵葉書「尾長鶏」(当館蔵)

企画展関連催し

- 講座
「日記・絵図・拓本に見る土佐国の安政地震」
5月25日(土) 13:00～15:00
講師: 当館学芸員 青井恵理香
- ワクワクワーク
「自分だけのオリジナルポストカードをつくろう!」
5月3日(金・祝) 10:00～15:30
- ミュージアムトーク(担当者による展示解説)
①4月27日(土)、②5月3日(金・祝)、③6月9日(日)
各回13:30～14:00

※企画展関連催しは、全て観覧券要。
講座は要申込(電話・メール・FAX)、先着60名。

次回企画展

秘められた神と祭り

― 高知県の不思議をたずねて ―

7月19日(金)～9月23日(月・振)

祭りといえば派手にぎやかなもの。でも県内には人知れず行われる儀式や深夜の祭りも各地にあります。本展では、香南市の烏喰い神事、高知市のお樽行事、中土佐町のおみこくさん、香美市のいざなぎ流などの写真や用具を展示し、高知県の神秘的で不思議な民俗を探訪します。



いざなぎ流 仮面
(当館蔵)